CenturyBooks

徳富蘆花

福田清人
岡本正臣

●人と作品

清水書院

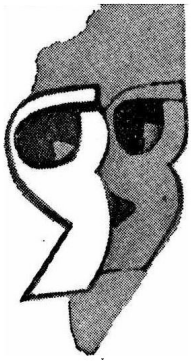
徳富蘆花■ 人と作品35 定価はカバーに表示

昭和42年12月10日 第1刷発行©
昭和55年6月5日 第6刷発行

・編著者……福田清人／岡本正臣
・発行者……野村久也
・印刷所……柳沢印刷所
・発行所／清水書院／東京都新宿区東五軒町5
Tel・東京(260)5261～6／振替・東京 3-5283
郵便番号 162

検印省略
落丁本・乱丁本は
おとりかえします

CenturyBooks 清水書院



徳富蘆花

●人と作品●

35

福田清人
岡本正臣

CenturyBooks　清水書院

原文引用の際，漢字については，
できるだけ当用漢字を使用した。

序

若い時代に、史上いろいろな業績を残した人たちの伝記やすぐれた文学作品に親しむことが、その人間形成に大いに役立つことは、改めて記すまでもない。ことに美と真実を追求した文学者の伝記は、感動をよぶものがあり、その作品理解のためにも必要なことである。

たまたま清水書院より、近代作家の伝記と主要作品鑑賞のための「人と作品」叢書の企画の相談を私は受けた。そしてその執筆者も既成の研究者よりもむしろ新進の研究者の新鮮な筆を期待するということであったので、私の関係していた立教大学の大学院で近代文学を専攻している諸君を多く推薦することにした。

こうして叢書の第一期九巻、第二期十巻は一九六六年に刊行された。読者カードを見ると、若い層はもちろんかなり年配の人の手にまで渡っているようで、その平明な表現のなかに、それぞれの筆者が若い情熱をこめた内容は、挿入の写真とあいまって、かなり好評で、監修者としても喜んでいる。

さて、その第三期中の一巻がこの「徳富蘆花」である。この筆者岡本正臣君は小田切進教授について近代文学を専攻していたが、私の研究室にも出入していた。

徳富蘆花は、大衆には『不如帰』の作者として知られているが、近代文学者の中で、求道的生涯をつらぬき、その『自然と人生』はかつての若い人々の愛読の書であり、『思出の記』、『黒い眼と茶色の目』等も広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

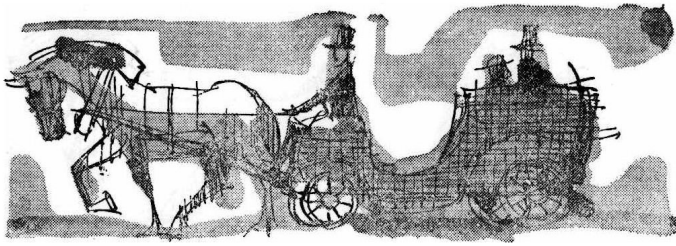
く読まれた。

まだ武蔵野の面影をのこす粕谷の旧屋あとは、蘆花公園として、彼の田園生活のあとをしのばせ、伊香保は『不如帰』によって有名になったゆかりもあって、その忌日には同地蘆花公園で蘆花祭を催し、かつて私もその祭典に招かれて赴いた思い出もある。

こうした蘆花の姿が本書によく描かれていると思う。

写真は粕谷の蘆花記念館、伊香保の千明仁泉亭、ならびに逗子・今治両市役所のご配慮によるものを多くいれてある。

福田清人



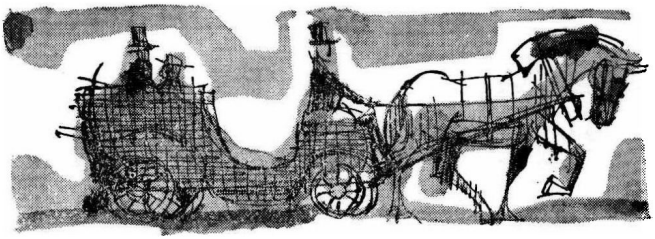
目次

第一編　徳富蘆花の生涯

公卿衆の子……八
遭難……四三
はなやかなデビュー……六八
心的革命……九二
自然の中へ……一〇一

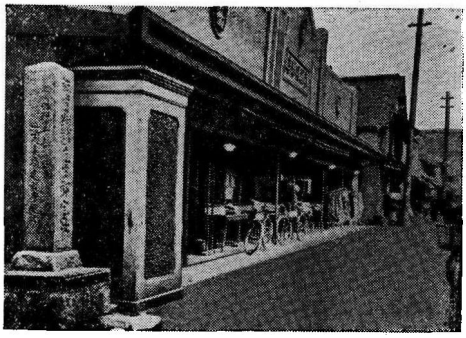
第二編　作品と解説

不如帰……一一三
灰燼……一五二



自然と人生……一三〇
思出の記……一四四
黒　潮……一五〇
寄生木……一五七
みみずのたはこと……一六四
黒い眼と茶色の目……一七三
新　春……一八一
富　士……一九二
年　譜……一九九
参考文献……二〇七
さくいん……二〇八

第一編　徳富蘆花の生涯



蘆花の生家
（昭和6年ごろ撮影，熊本県水俣市）

公卿衆の子

「おお、これは奇麗な子、公卿衆の子の様ぢや」
（『富士』）

公卿衆の子

祖父の太善次は生まれたばかりの赤ん坊をのぞいてこういった。これが後の文豪、徳富蘆花となる人の誕生である。

赤ん坊は健次郎と名づけられた。徳富家、第七番目の子どもである。この子には四人の姉があった。一番上の姉が常子、その次が光子、音羽子、初子という順である。そしてその下に徳富家待望の嫡子であり、健次郎の兄にもあたる猪一郎が生まれていた。

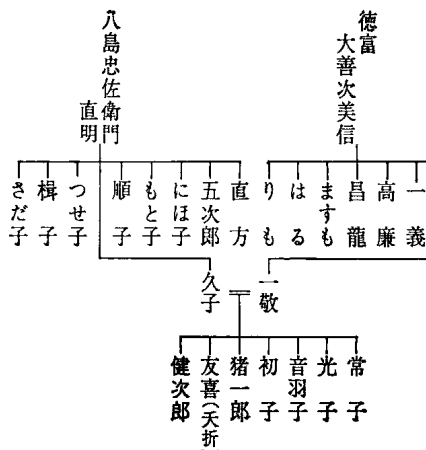
健次郎が生まれた時、兄の猪一郎はすでに六歳になっていて、この物わかりのいい兄は、生まれたばかりの弟の赤い顔を自分の黒い顔と比べながら興味深げにながめていた。

この兄のほかに健次郎には、今ひとり、兄となるべき人があっ

た。しかしこの兄は健次郎が生まれる四年前に友喜という名前をもらうまでもなく、生まれるとすぐに死んでしまった。

こうして徳富健次郎は、明治元年(一八六八)十月二十五日、熊本県葦北郡水俣(現在の水俣市)に徳富家の三男として、父一敬、母久子のあいだに生まれた。その日は、明治になってやっと四十七日目のことであった。

徳富家系図



徳富家

徳富家には豪快な家風を反映させた数多くのエピソードがある。その中に初代、徳富忠助に関する次のようなものが目をひく。初代忠助は、一六三七年に起こった島原の乱に細川忠利の一隊に属していた。かれはこの戦いで有馬城攻略の際に、海辺から大砲をうちこむという大手柄をあげて、主君から肥後の国葦北郡水俣の郷を永久領土としてたまわった。そして、これが徳富家の開祖となったのである。以後、徳富家は当地の気骨ある郷士として総庄屋と代官を兼ね、この地を治めた。

このほか、四代目徳富一廷について次のようなエピソードが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

伝わっている。

一廷は、情のある下僕思いの武人であった。

ある夜、この役所に酔漢があばれ込み、乱暴狼藉を働いた。下僕ふたりはこれを刺し、勢いあまってこの酔漢を殺してしまった。

これに対して奉行所は、これら下僕に入獄を命じた。これを見て、主人の一廷は怒り、下僕ふたりの生命と徳富の家名を守るために切腹を敢行し、自らの生命でこの急場を救った。

一子久貞は、このため十九歳で家を継ぐことになった。これが徳富家中興の祖と呼ばれる太多七久貞である。

久貞は臨済宗大徳寺派の碩学独生和尚に師事して、宝暦年間、当時、紀伊の徳川治貞とともに、日本の二賢君と呼はれた細川重賢に抜擢されて、民政改革のために大きな力を発揮した。

その後、時代は移り、幕末になってここに健次郎の祖父が登場してくる。

この人はその一生で、これといってはなばなしい活躍をした人ではなかったが、彼には南国の男性特有の野武士の気性があった。徳富兄弟はこの祖父を次のようにそれぞれ描いている。

まず蘇峰は、

「津奈木の総庄屋として勤めていた際、一寸百姓一揆らしきものが起つて喊の声をたてて官舎を取巻いた。然るに祖父は耳元を聞かざるもののごとく隻肩をぬぎ灸を背に据えて平気ていた。」（『蘇峰自伝』）

といい、一方、蘆花もそれに輪をかけ、

「一揆が近くに迫つても褞袍一貫、帯一つせず炉側に胡座かき、好い時分に巨魁十数人を縛つて牢屋に繋ぎ、正月になつたので振舞うたり、大酒ひつかけて酔えば得意の『阿古屋琴責』を唸る祖父」

と晩年の長編『富士』の中で語っている。

後年、さまざまな反目をかれらの人生に展開するようになる徳富兄弟も、この祖父、太善次に対する尊敬の念はこのようにいつも同じであった。

蘆花の父　健次郎の父、一敬は豪快な家風を誇る徳富家にはそぐわない人だった。そのため祖父の太善次は、家督をかれにゆずるのをいさぎよしとしないで、次男の熊太郎一義に、自分の跡を継がせるつもりでいた。次男の熊太郎一義は熊太郎と呼ばれるだけに、太善次の荒い気性をよく受けついで、抜群の体格を誇っていた。そして、心もやさしく、当時人望の厚かった横井小楠の塾においても、秀才の誉れが高く、文武両道に通じる人物として、太善次の鑑識にかなっていた。

ところが嘉永六年(一八五三)、この熊太郎が、突然チフスにかかって、あっけなくこの世を去ってしまったので祖父は落胆した。しかし、そうかといって今さらあっさり長男の一敬に家督を継がすのは、太善次の昔気質が許さない。そこで太善次は思案にくれた。そうこうしているうちにすっかりあきらめていた男の子が長男の一敬に生まれ、ついで健次郎がここに出産するに及んで、徳富家はすっかり息を吹き返してしまった。

蘆花の両親　淇水翁（87歳），久子刀自（80歳）

そこで祖父太善次はとうとう長子、一敬に家督をゆずることに腹をきめた。そのあたりの事情を蘆花は、

「祖父は中々父に家督を譲らなかつた。父の旧記の中に熊次（蘆花）は父の八幡詣の述懐を見た事がある。八幡様は応神天皇、御母神功皇后の頑張りで六十歳になつてやつと天皇として御即位なつた御方である。」

といい、

「それらの懊悩で父の立場は苦しく克己我慢の果は、大酒になり烈しい癇癪になり、女を愛して欝を漏らしたりした。」（『富士』）

と語っている。

一方、兄である蘇峰は徳富家における自分の立場を、

「如何に予の生まれたる事が予の家にとつて大事件であつたかは想像も及ばぬ程で、是れ迄陰欝であつた吾家は、急に光明となり……。」

（『蘇峰自伝』）

と述べている。

こうして蘆花の父一敬は不幸にしてその父太善次に好かれず、それだけに苦労の多い人であった。豪気一点ばりの祖父から見れば、一敬はなるほどいかにも頼りになりそうにない人物であるが、しかし、少し見方を

変えてみるとそうとばかりはいえない節もその人生の中にのぞかれる。というのは一敬もまた、太善次の愛した熊太郎と同様、横井小楠門下の秀才であったし、竹崎律次郎・矢島源助と並び称される三高弟のひとりであったからである。

師の小楠はこの愛弟子三羽烏を、

「竹崎は器用過ぎて考えが深く及ばぬ。徳富は考えか綿密過ぎて決断か足らぬ。矢島は不凡て眼も見え果断だか後がつまらぬ。」

と評し、尽きない愛情を持ってながめている。わけても一敬に対しては小楠か塾を開いた時、最初に弟子入りした事情もあって、明けても暮れてもこの最古参の門弟を頼りにしていたという。

「一敬。一敬はどうした。」

これが年老いた師、小楠の口ぐせであったという。

そんな師に対し、弟子の一敬も文字通りよく尽くし、この師が明治二年(一八六九)一月、京都寺町通りで暗殺されると、残された家族のために少なからぬ援助の手をさしのべている。

小楠の兄、時明の子、左平太・太平の二児が米国へ留学することができたのも、一敬が持っていた古金と山の売買で作った費用によった。

蘆花の父一敬は、当時としては相当の教養を修めた文化人であった。

蘆花の母

久子は一敬が小楠塾でよく知っていた矢島源助の妹で、彼女は一口にいって男まさりの女性であった。一敬がどちらかといえば篤実温厚な人であったがために、彼女の生まれつきの社交性は徳富家に嫁してからいっそう前面におしだされることになった。

兄の蘇峰は次のように母を語る。

「予の家は、特に予の母の時代となつてからは縁家親類の倶楽部同様であり（食事の時には別に用もない客がわざとやつてくるという始末で）斯くすることが予の母にとつては恐らく一つの習慣と云わんよりは快楽であつたかも知れない。」（『蘇峰自伝』）

と母の社交性を伝えている。一方、蘆花もそんな男まさりの母を、

「母の母は其の女の覇気過ぎるを気にして観音様に願をかけ、死ぬる時、母を呼んで卿に願を譲ると遺言したそうだ。母は母から謙抑の願を譲られた。」（『死の陰に』）

とユーモラスにぼかしながら母を語っている。

弱虫・泣虫・怒虫

生まれたばかりの赤ん坊の健次郎は夜となく昼となく泣きつづけた。健次郎には十分な母乳がなかったのである。かれはひもじくて母の乳首を絶えず探した。癇の強い母は、そんな末の赤ん坊をうるさそうに抱きあげると、しなびて押せど突けど乳など一向に出ようとしない乳房をあてがっていた。姉のひとりが母のところへやってきて、「乳が少ない」と母に告げると、母はさっそく彼

女を酒屋にやった。まもなく彼女は甘酒の元になるこうじを買っていそいそとやってきた。こうして赤ん坊の健次郎は、母乳の代わりに甘酒を飲まされることになった。

この点について蘆花の門下生で、すぐれた研究者である前田河広一郎はその著『蘆花伝』の中で次のように述べている。

「私達はここに母乳と、甘酒といわれる一種の醱酵性飲料とのビタミン栄養価の含有量の比較分析を試みようとはしない。

ただ、この赤ん坊が五歳になったころの記憶に、『顔一面に腫物を生じ、長く癒えず』とあり、また、小学校へ通うころになっても『成績優秀なるも、身体虚弱』と書いてあるのに公卿衆の子がどうしてそんなに汚くなったか訝るものである。……さらにこれはすこし理想的な食餌方法であろうが、最近アメリカの育児に関する臨床的実験の結果授乳期の母親の一日の適量の栄養摂取は、次の如き配合でなければならぬと云われている。『即ち生果物一個、調理した野菜物二個、調理した果物一個、生野菜一個、一クワートの牛乳、犢の肝臓、麦芽糖大匙一杯』と。」

それかあらぬか健次郎は一生を通じて絶えずくだものを要求した。そしてそれを裏づける資料として、「果物の中で余は恐らく柑橘を第一に愛する。県では三番と下らぬお役人の大切にされた季つ子でありながら、好きなもの故に二、三丁の野路を袋ぶら〳〵一人でミカン買いに行く五歳の男の子を余は知っている。」（『死の蔭に』）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo